

福岡観世会定期能

令和五年



能通かよひ

小

町まち

多久島利之

雨夜之伝

狂言

萩はぎ

大

名みょう

野村 万禄

能熊くま

坂さか
替之型

観世 清和

とき 5月20日(土)
午後1時始(12時開場)

ところ 大濠公園能楽堂

入場券 指定席 8,000円
自由席 6,000円
※当日券各1,000円増し

発売所 大濠公園能楽堂
☎092-715-2155



卷 絹 仕舞
 清 經 長宗 敦子
 隅 川 菊本 美貴
 錦 木 今村 宮子
 葵 上 菊本 澄代
 木月 晶子

通小町

多島島法子
 多島島利之

後見 山口剛一郎 小倉要二郎
 坂口信男 久田勘吉郎
 地謡 井上裕之真
 今村嘉太郎

△休憩 十五分△

難波 仕舞
 今村嘉太郎
 坂口 貴信
 鷹尾 維教
 小松 風 鷹尾 維教
 小鍛冶 山口剛一郎

△休憩 十分△

萩大名

太郎冠者 上杉 敬太
 大名 野村 万祿 茶屋 吉良 博靖

放 下 僧 小歌 今村 一夫
 蝉丸 森本 哲郎
 春日龍神 久保誠一郎

笠之段 観世三郎太
 井筒 武田 宗和
 天鼓 坂口 信男

△休憩 十分△

熊

観世 清和

能

替之型

アイ 吉住 講

大鼓 白坂 信行
 小鼓 幸 正佳
 太鼓 田中 光次

後見 鷹尾 維教 井内 政徳
 武田 宗和 今村嘉太郎
 地謡 山口剛一郎
 久保誠一郎

通小町

「煩惱の犬となつて打つたると離れじ。」恋を欺かれた男の執念とそこから逃れて成仏を願う女の物語です。

八瀬の里で夏安吾をしている僧の許へ、毎日木の実や薪を運んでくる女がおりました。名を尋ねると、市原野に住む姥小野だと答え、「小野とはいはじ薄生ひけり」と口ずさんで姿を消してしまいました。「秋風の吹くにつけてもあなめあなめ」と小町のどくろが呟く上の句に、在原業平が「小野とはいはじ薄生ひけり」と下の句を付けたという故事を思い出した僧は、先程の女が小野小町の霊だと察します。

市原野へ出向き小町の供養をする僧の前に、小町の霊が現れ、有難いと喜び、受戒して成仏したいと願います。そこへ深草の少将の怨霊が現れて、私を一人残して成仏はさせないと妨げようとするのでした。二人に受戒を勧める僧は、懺悔のために百夜通いの有様を語るよう少将に促します。少将は狂おしく語り始めます。一雨の夜も雪の夜も、鬼が出るという夜さえ、小町との約束を守るためにひたすら通つた。ようやく恋が叶うというその百日目。それまでの無理がたたり自分は命を落としてしまった。死んでなお、地獄で苦しんでいるのだ。黒頭を振り乱す少将の怨霊ですが、ただ陰惨なだけではなく、大宮人であった上品さと一本気な健気さも思わせます。

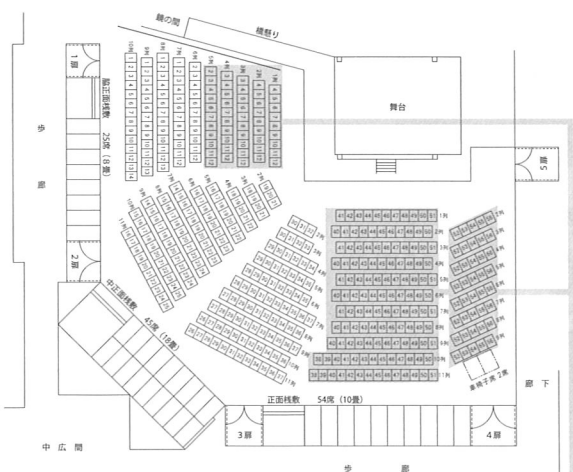
「雨夜之伝」の小書が付く今回は「立廻」の場面にて、そぼ降る闇夜をただ独り、徒歩にて通う少将の心情を強調いたします。

萩大名

長い間在京していた田舎大名が、帰国の前に太郎冠者の案内で庭園の花見に出かけます。花見の席で和歌を詠めと言われた場合を予想して、太郎冠者が「七重八重九重とこそ思いしに 十重咲きいずる萩の花かな」という和歌を教えますが、大名はなかなか覚えられません。そこで太郎冠者は、扇を少しずつ開いて、その骨(扇の竹の部分)の数で「七重八重」、萩は足の脛(はぎ)を指すなど物になぞらえて、ひそかに合図を送る事にします。そして、花見が始まりますが...

熊坂

東国行脚に向かう僧が、ひとりの僧に美濃国熊坂で呼び止められ、今日が命日の者のために回向を望まれます。回向を頼まれたものの、案内された庵に仏像はなく武具が沢山おいてあります。それを不審に思った僧に、辺りに出没する山賊に備えるためと返し、「お休みあれやお僧達」と言い残して去っていきました。ふと気づくと、庵は消え、僧はただ草の原にいたのでした。出会ったものから、この地で打たれた大泥棒熊坂長範のことを聞いた僧は、供養をしようとして説経を始めます。いよいよ熊坂の霊が登場いたします。いかにも大泥棒の頭目といった顔つきの面と長範頭巾に大長刀の出で立ちにござります。牛若丸とのやり取りなどの逸話を語り始めますが、その縦横無尽な動きは時としてまるで飛鳥のようで、舞台には居ない牛若丸の姿まで彷彿とさせます。「替之型」の小書になりますと、後場の僧との問答の場面や仕方話、更にはその後の動きに変化がございます。鮮やかで胸のすくような能でございます。



指定席 (その他は横敷席を含めて自由席となります。)

主催 / 福岡観世会